

ユカラを猛練習。 寝てからも ユカラが夢に出てくる。

Masashi Kawakami



『萱野茂二風谷アイヌ資料館』に隣接し、チセ(家)が再現されている。川上氏は囲炉裏のあるチセでユカラの練習を重ねた。大会発表のときは、目を閉じ、そのシーンを思い描きながらユカラを語ったという

実際僕もチセの囲炉裏で練習したんですけれど、肩の力を抜きながら炉端を、コン、コンと叩いて調子をとって語っていく。英雄がいま空を飛んでいるとか、手ごわい相手をやっつけているとか、かわいいガールフレンドができて仲良くしてるとか、そういう描写を一定のリズムで表現していく。で、語り手の調子がよくなってくると、リズムも早くなってくる。周りの聴き手からも、オッ！ハッ！と、かけ声の合の手が入る。ヘッチェっていうんですけどね。そのヘッチェが入ってくると、語り手もノッてきて、リズムが変わり、叩き方も力強くなつて、ウオ~~~~!!つて、ね」

このノリのよさは「ラップミュージックにも通じる」という。「僕は、CDからJPOPとか覚えたりするんですけど、ユカラも同じように覚ええました。リズムがあるから覚えやすいんですよ」

ユカラで夢のつつきを

覚えるのは大変なのでは？「繰り返し繰り返し、耳でしっかり覚える。同時に日本語も頭に入れていく。基本的には勉強に近いことだから、僕と同じ世代は面倒く

さがつてやらないかも。でも、新しいゲームを覚えるような、新しい漫画を読み始めるような、そんな軽い気持ちで始めるといいんですよ。まず僕がユカラを一曲まるまる覚えてみる。そのユカラを聴いて共感してくれた人が教えてつていったら、バンバン教えちゃうんだけどな」

学びながら楽しみながらの、ユカラの話は尽きない。「チセじゃない、普通の住宅で僕は生まれ育ってきましたが、チセのカヤの匂い、囲炉裏で燃える木の匂いがすごく好きなんです。なんだかとても懐かしくて、落ち着く。たぶん遺伝子に刷り込まれている、なんて思ったりしてるんですけど」

川上氏をとりこにしたユカラ。青年はなぜユカラと向き合い、どこに向かおうとしているのだろう。川上氏は長い時間をかけ考え、言葉を選び、そしてこう答えた。

「僕はアイヌ民族ですが、自分がユカラを語っているときに、あらためてそれを再認識することができなのです。僕はこれが一番得意、というより他はまったくできないので、この分野で自分の力を伸ばし、この文化を伝承していきたい。これはとても大事なことです。アイヌ民族



アイヌ口承文芸

アイヌ民族が育んできた文化の一つ「口承文芸」。長い間途切れることなく語り伝えられてきた口承文芸の物語には、「英雄叙事詩」「神話」「散文説話」などがある。比較的耳にする「ユカラ」という言葉は、英雄叙事詩を指す呼び名の一つ「ユカラ」から来ている。アイヌ文化を保存し伝える団体や各地域では、口承文芸を始め、アイヌ文化を広く紹介し理解を深めるため、さまざまな取組みが進められている。